

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

編集後記

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

136

(終了ページ / End Page)

136

(発行年 / Year)

1980-02-10

日本文学誌要 第23号 発行にあたって
近藤忠義・小原元追悼号

ほぼ十年ほどにわたって、国文学会は独自の活動のないまま、その機能を停止していた。大学問題の激しい運動のさなかで、その対応に追われて実務に携ることが不可能であったこと、また事務を担当し得るものが存在しえなくなったこと、などがその原因であるが、学会の存立の意義そのものが、その構成員にとって不可欠のものであると自覚されていなかったことが根本にある、ということもできよう。学会は、その間、学生委員会が主催する講演会などの活動に、その経費の一部を負担するだけであった。

一九七〇年に、日本文学誌要 第22号を発行して以来、学生委員会の手によって、臨時号として、一九七四年に一回、『誌要』が出されただけで、『誌要』も学会の停滞とともに休刊が続いてきた。そのような状態のなかで、一九七五年四月、われわれは、小原元教授を病魔に奪われることになったのである。小原元教授追悼として、『誌要』を再刊したい、という声はその直後からおこり、ただちにその準備がはじめられた。本誌の追悼文は

その後間もなく寄せられたものから収められている。中心の担当者のないままに、編集もはかどらない内、その翌年、一九七六年の同じ月、こんどは近藤忠義教授の逝去にあつた。そして、すすめていた『誌要』は、両教授の追悼を、ということになって、論文執筆の依頼もはじめた。といつても、なお事務担当の中心がないままである。それから今日まで、まる三年が経過してしまつた。

一九七八年四月には、本号掲載の論文は殆んど集り、九月には、近藤忠義教授追悼の文章もよせられたが、なお若干の問題がこのつて、ようやく一九七九年六月、原稿のすべてがととのい、刊行のはこびとなつた。その間、本年の正月には、十年ぶりで総会がひらかれ、二年前から大学が日本文学科の事務担当者の財政的措置を乏しいながら講じることになったのとあわせて、国文学会の活動を再開することが可能となつた。総会は昭和初期の卒業生から、半世紀におよぶ幅の参加をえて盛況裡に終り、今後の運営にあたる委員も選出された。委員は従来のように、事務・企画・編集の三部門にわかれて、実務を担当することになったが、本号が編集部という組織のないままに、単独ですすめていたため、予

想をこえて遅延し、寄稿の方々にも多大の迷惑をおかけしてしまつたが、次号からは新しい編集部のもとに、国文学会の組織的な活動の一環として『日本文学誌要』の刊行が続けられることになる。とにかく活動を再開するなかで、国文学会の存在意義や、誌要刊行の役割などが、改めて検討されていかなければならないであろう。「あとがき」にかえて、本号発行までのいきさつをあらましを記した。

(杉本)

一九八〇年二月一〇日発行

日本文学誌要 第二三号

編集 法政大学国文学会

印刷 株式会社 溪 声 社

東京都文京区本郷二丁目一六
電話 〇三(816)五三七五

発行 東京都千代田区富士見町二

ノ一七法政大学大学院内

法政大学国文学会

電話代表 〇三(264)九四〇八

振替 東京 六九四三